



シリーズ12

人材は決して枯渇しない

尾州・テキスタイル・カレッジ講座2 「差別化の源流・究極の動物繊維」

講座3 「繊維で決まる糸模様」担当 田中 孝幸
(ザ・ウールマーク・カンパニー アジア開発センター)

本原稿の執筆時（5月中旬）米英によるイラク統治はいよいよ泥沼化の様相を呈し、6月末に迫ったイラク人への主権委譲に対して悲観的な観測が支配的である。

人が羊を飼い始めたのは、戦禍の激しいこの地域が最初であると言われている。紀元前5000年以上昔のことである。

口腹を満たす食糧として、寒暑をさえぎる衣料として、時には贖罪儀式の贊として、羊は人間の生活にとって極めて有益であった。そのうえ温和で忍耐強く、飼育しやすい性質であったために、羊は西アジアや中央アジアの山岳地帯の農村に広く飼育されるようになった。

長い変遷の間、寒風吹きすさぶ北海の島々、岩だらけの山岳地帯、一年中ほとんど雨の降らない砂漠、じめじめした沼沢地など、羊はそれぞれの環境に順応して生き抜いてきた。そのためウールには、生命を維持するために必要な要素が互いに複雑に絡み合いながらも、巧みに調和しながら存在している。

- ウールマットの上で育てた乳児は、他の場合より一般的に成長が早い。
- 酷暑環境に生活する砂漠の民はウールマントを纏っている。
- 危険と隣り合わせのカーレーサーはウールのレーシングスーツを着用している。

これら、一見意外なウールの使用例は、羊の生命維持機能を最大限に利用したものである。現在の地球の環境で、そこに人が住む限り、ウールは最適の衣服素材である。どんなに科学が進歩し、新しい機能の繊維が登場しようと、ウールを超えて人の健康や快適性に

貢献できるものは生まれ得ない。

当カレッジの受講生にはウールを勉強するのは初めてという人が少なくない。また、ウールの専門業者でも、ウール本来の性能を理解している人は多くない。

私の講座では小学校の理科のような小実験を用意し、ウールの不思議な性質を体験することに主眼を置いている。言葉で説明するよりも、体験した方が理解は断然早く、忘れ難い。たいていの受講生は「そうだったのか！」と、驚きを隠さない。まさに、「(ウールの)ウロコを学んで、(目から)ウロコが落ちる」瞬間である。

生産拠点がアジアへシフトする現在、やがて技術者が枯渇し、国内の製造業が崩壊すると指摘する識者は多い。当カレッジにもそれを懸念する講師がいる。

しかし、私は悲観していない。

昨今の繊維産業の変化は、日本が繊維生産国から繊維消費国に移行したために起こった現象である。それは産業の発展段階として当然の成り行きであり、進化の証しでもある。だから、これから日本は消費のための技術やノウハウが尊重され、成長するだろう。技術の中身は変化するが、技術そのものが廃れることはありえない。そして、消費のための技術には本質の把握が不可欠である。

当カレッジの受講生は大半が20代後半から30代である。彼らは皆、ファッショナブルで明るい。考え方も、着こなしも柔軟である。元気な若い人の多い日本の繊維産業は衰えるどころか、ますます盛んになって行くに違いない。